

小さな仕事を積み重ねて、大きな夢につなげたい

総ヒノキの柱や建具に、湯気が見えそうな天ぷらそば。建具職人として多忙な仕事の傍ら、坂野さんは精巧なミニチュアハウスなどを制作し、地域住民の目を楽しませています。

【好きこそ物の上手なれ】

近所では「大将」と呼ばれる坂野さん。地元祭りの催しなど、事あるごとに木工細工を頼まれます。

建具職人として生きていく決意をしたのは、今から50年以上も前。島田に腰を据えてからは、その器用な腕前とサービス精神が、地域活性化に一役買っています。

「毎日違う現場を飛び回っているから、暇はそう無いけど、地元で役立つと思うと、引き受けちゃうんだよね。この商売だって、もともと木工



が好きで始めたんもんで、木を相手にするのが、苦にならないのかもしれないね」

【活力は地域の笑顔】

「昔、うちの子が通う小学



建具職人・ミニチュアハウス制作  
坂野 國夫さん（東町）

所の協力も得られて、おかげさまで15年以上続いているよ。自分がそうだったように、地域の集いが、今の子どもたちの心に残れば、うれしいね」  
人を喜ばせるために苦勞を

校から、何か遊具を作れないかって聞かれて、幾つか作ったら喜ばれてね。もつと子どもたちの笑顔を見たくなくて、思いついたのが夏祭り。全てが手探りだったけど、近

買って出る性分が、その笑顔からにじみ出ています。

【故郷に時く絆の種】

室内でも木の感触を楽しめるよう、人形と遊べる木工家

具を作り始めた坂野さんは、ドールハウスとの出会いをきっかけに、3年前から精巧なミニチュアハウスを制作しています。

「より難しい細工に挑戦しなくなつてね。木工は得意だけど、小物に必要な粘土細工は素人。試行錯誤して、やっと3点を仕上げたよ。テーマは全て、古き良き日本の生活。老人施設に置いてもらったから、みんな懐かしいって笑ってくれて、若い子に説明までしてくれたよ」

坂野さんが蒔いた種は、地元で芽を出し始めています。

「先日、市外の現場で若者が、十数年前に招かれた図工の授業で会った児童だつて声を掛けてくれて、びっくり。全てが報われた気がしたね。こうして年を経ても、人と人がつながる。この安心感が、故郷ってことなのかな」

現在、坂野さんは4作目となる「なつかしの教室」を制作中。将来の目標は、地元で木工教室を開くことだそうです。小さな箱家には、大きな夢が詰まっています。



制作に1年を費やした「そばの丸八」

Shimadian File #30

